

# 高山域で確認された動物

篠田授樹<sup>1</sup>・白石浩隆<sup>2</sup>

## はじめに

言うまでもなく、富士山はわが国の最高峰(3,776m)である。実は、標高第二位の山も山梨県にあって、南アルプスの北岳である。その海拔高度は3,192mであるから富士山はこれより500m以上も高いことになる。しかし、富士山ぐらいの緯度と標高であれば、山頂付近には本来、高山植物の草原が形成されてもおかしくないと考えられている(宮脇・菅原 1992)。実際には植生に乏しい火山荒原や地衣帯となっているのは、富士山が若い火山である上に、周囲の高山帯から離れた独立峰であるためと説明されている。このことは、北岳でみられるような高山性の動植物がないことの理由ともなっている。

それでも、日本の最標高地にどのような生物が棲んでいるのか、ということは単純な興味を惹く。同じような関心は過去にもあったようで、宮尾嶽雄、黒田長久ほか、朝比奈正二郎、各氏は有名な富士急行(1971)「富士山総合学術調査報告書」の中で、それぞれ哺乳類、鳥類、昆虫類について記録を残している。だが、それ以来約30年の間、とりたてて新しい調査は行なわれていないようである。

今回の生態系多様性調査では、高山域を代表する場所として森林限界に共通調査地点(St.1)を設けた。だが「富士山」を対象とした調査で、これより高標高域にまったく触れないというのは、何か物足りなさを感じざるを得ない。そこで、限られた機会ではあるが山頂まで足を運び、そこで実際に確認された動物種の記録をまとめた。

## 調査方法

調査は、脊椎動物(哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類)および無脊椎動物(主に昆虫類)を対象とした。調査地点はSt.8富士山頂、St.9吉田口登山道八合目、St.10七合目、St.11六合目、St.63

植生限界、St.62森林限界である。山頂では、主に久須志神社、雪渓、剣ヶ峯などで調査した。各地点の植生などの特徴は表1に示すとおりである。

表1 富士山高山域の主な調査地点

St. 地点	標高	植生などの特徴
8 富士山頂 (剣ヶ峯)	3776m	火山荒原(地衣類)
富士山頂 (雪渓)	3680m	火山荒原(地衣類)
富士山頂 (久須志神社)	3720m	火山荒原(地衣類)
9 吉田口八合目 (白雲荘)	3230m	砂礫地(ワスレなどが点在)
10 吉田口七合目 (鳥居荘下)	2950m	森林限界(ミヤマソノキ)
11 吉田口六合目 (指導センター)	2400m	砂礫地(周囲はダケカンパ・ミヤマソノキなど)
63 植生限界	3200m	岩盤(オウゴン・ワスレ)
62 森林限界	2900m	溶岩・火山荒原 (カラマツ・ミヤマソノキ)

共通調査地点St.1(2,400m)は除く  
St.62と63の標高は最高地点のもの(表2参照)

哺乳類は、ネズミ類を対象としたトラップによる採捕、自動撮影カメラの設置、糞や足跡など痕跡の記録を行なった。ネズミ用トラップは、St.8、St.9、St.11、St.62に設置した。このうち吉田口登山道沿いの3地点では、シャーマンタイプのライブトラップ5個、かごワナ2個、はじきワナ3個をそれぞれ山小屋などの建物の周囲に置いた。誘引餌はヒマワリ種子と魚肉ソーセージ、チーズを用いた。2002年7月下旬に設置し、8月下旬の回収日を含めて3回(St.11は9月上旬の回収日を含めて4回)見回った。St.62はシャーマントラップ5個を、森林限界付近にある矮性のカラマツ根元に括りつけ、8月下旬に設置、9月中旬に回収した。誘引餌は上記と同様である。St.62では同期間に、自動撮影カメラ3台も設置した

<sup>1</sup> 地域自然財産研究所 <sup>2</sup> 自然体験計画ひめねずみ社

(成果なし)。鳥類、爬虫類、両生類は、目視して記録した。

昆虫類は、衝突板トラップ法、見つけ採りなどによる採集を行なった。衝突板トラップ法は主に訪花性、食性種の種を対象に、色彩と臭気によって採集する方法で、本調査では内径 23 cm、高さ 28 cm のプラスチック製バケツに幅 28 cm、高さ 15 cm のカラーボード(衝突板)を十字形に据え付け、ソルビン酸と中性洗剤を混ぜた水を入れた。衝突板の色彩は赤、黄、白の 3 色を組み合わせ、誘引剤として酢酸ベンジルとエタノールを用いた。吉田口登山道に沿って St. 8、St. 9、St. 10、St. 11 を調査地点とし、1 地点あたり 2 個を、樹木や建物の高さ 50~150 cm 程度の場所に設置した。回収はネズミ用トラップと平行して行なった。見つけ採りは捕虫網や吸虫管、素手による直接採集を実施した。St. 9 八合目では夜間、山小屋の灯火に來る昆虫類の採集も行なった。

確認記録は、筆者らのほか、昆虫類ハチ目は萩原康夫氏、蛾類は瀬子義幸氏にそれぞれ資料を提供していただいた。一部の種の同定は、専門家に依頼した。

哺乳類用トラップ、衝突板トラップの設置にあたっては、富士山頂浅間大社奥宮久須志神社、八合目白雲荘、富士吉田市富士山安全指導センターに場所をご提供いただいた。本調査で「高山域の植物相」を担当された渡辺長敬氏には長年にわたり調査されているフィールドをご案内していただいた。ここに御礼申し上げます。

## 調査日

2002 年

7 月	26 日	St. 11、10、9、8	篠田・白石
8 月	1 日	St. 62	篠田・渡辺通人・ 渡辺長敬・宮下
8 月	5 日	St. 11、10、9、8	篠田
8 月	12 日	St. 11、10、9、8	篠田
8 月	13 日	St. 9、63	篠田・白石
8 月	21 日	St. 62	篠田・伊藤・萩原
8 月	27 日	St. 11、10、9	篠田・瀬子・原田浩
8 月	28 日	St. 8、9、10、11	篠田・瀬子・原田浩
9 月	18 日	St. 62	篠田

## 調査結果および考察

### 確認種

本調査の結果、富士山の高山域 (2,400m~3,776m) において哺乳類 5 目 6 科 10 種、鳥類 3 目 4 科 4 種、昆虫類 10 目 45 科 88 種が記録された(表 2)。爬虫類、両生類は確認されなかった。これ以外に、昆虫類ではトビムシ目、ハチ目、ハエ目を多数得ているが、種の確定ができていないものは原則的に除いた。さらに、ダニ類、クモ類、多足類などの無脊椎動物も若干得られている。

なお、ここでいう「高山域」には、本調査の共通調査地点 (St. 1: 森林限界) は含んでいない。

以下、主要な確認種について述べる。

### 哺乳類

富士山の六合目以上は、溶岩噴出物の砂礫の堆積や溶岩の露出が観察される。気候的にも厳しく、野生動物には生息しにくい自然環境にある。また地史的な理由から、本州の高山を代表する哺乳類であるヤチネズミ *Eothenomys andersoni*、アズミトガリネズミ *Sorex hosonoi* も生息していない(今泉吉典 1971)。したがって、哺乳類相はきわめて貧弱である。過去に富士山頂で記録のある哺乳類は、ヒメネズミ *Apodemus argenteus*、アカネズミ *Apodemus speciosus*、スミスネズミ *Eothenomys smithii*、ハタネズミ *Microtus montebelli* の 4 種で(宮尾 1971)、今泉忠明 (1992) はこのほかにカゲネズミ *Eothenomys kageus* (筆者注: スミスネズミと同種とする分類見解もあり)、ドブネズミ *Rattus norvegicus*、ヤマネ *Glirulus japonicus*、モモンガ *Petaurista leucogenys*、ムササビ *Petaurista leucogenys*、山頂測候所職員からの聞き取り情報としてキツネ *Vulpes vulpes*、イノシシ *Sus scrofa*、カモシカ *Capricornis crispus* などをあげている。

今回の調査では、設置したトラップ数こそ少ないが、ヒメネズミが山頂で 7 個体、八合目で 1 個体、六合目で 5 個体、St. 62 で 2 個体、アカネズミが六合目で 5 個体、それぞれ確認された(個体数は積算。調査期間の途中で放逐した個体数はあわせて 1 個体と計算)。「小型哺乳類」調査では、ヒメネズミは St. 7 山地帯二次草原を除くすべての共通調査地点で得られており、低山から高山域まで富士山全域に分布していることが認められた。しかし、地衣類程度しかない山頂付近で、彼

らが何を採食しているのかは不明である。アカネズミは六合目のみの確認であったが、ダケカンバなどの低木が存在する七合目下部付近までは棲んでいてもおかしくない。ドブネズミなどいわゆる家ネズミの採捕を想定し、山小屋の残飯置場周辺などへもトラップを設置したが、その生息は確認されなかった。冬季閉鎖中の山小屋に保管していた食料が何者かに食べられてしまう、という話はよく聞く。今回も八合目付近の山小屋で被害に遭った、大きなネズミを見た、という話を聞いたが、それが何を指すのか不明である。

八合目白雲荘ではコウモリ類を観察した。夜間、山小屋の灯火に集まる蛾を捕食している様子で、明らかに大きさの異なる 2 種が含まれているようであった。概算では 10~20 頭程度を数えた。山小屋の人の話では、屏風岩から飛んでくるという。今回は確認に至らなかったが、洞穴性のコウモリが、これらの岩場の間隙を利用していることは十分に考えられる。

興味深いのはイノシシで、St. 62 周辺 2,600m 付近で糞を確認した。数年前に山頂で行き倒れになっていたという情報もあった。この付近は、森林限界の海拔高度が比較的高く、登山道から外れて人もほとんど立ち入らないため、無雪期にはニホンジカ *Cervus nippon* などの大型哺乳類も多く利用しているものと考えられた。

## 鳥類

確認種のうち、高山域で営巣が確認されたのはアマツバメ *Apus pacificus kurodae* とイワヒバリ *Prunella collaris erythropgyia* である。アマツバメは、屏風岩、三日月（吉田口登山道 3,200m 付近）などの岩場で少なくとも 50 羽を数えた。イワヒバリは、山小屋周辺に営巣している。

オオタカ *Accipiter gentilis* は 2,800m 付近にて低空を飛行し、カラマツの枝にとまった。

富士山高山域の鳥類を語る上で、触れておかなければならないのがライチョウ *Lagopus mutus japonicus* であろう。本来、富士山に生息していなかったライチョウを、1960 年に放鳥した。北アルプス白馬岳産の 7 羽（1♂、2♀、4 幼鳥）で、放鳥地は静岡県富士宮口五合目（2,400m）である。一時は営巣も確認され、1964 年には 10~14 羽まで増えたと推測されたが、すぐに減少し 1970 年の 1 幼鳥の観察を最後に姿を消した（黒田ほか 1971）。かなり乱暴な話だが、当時は好意的に受

け取られていたようである。現在、ライチョウが生息している可能性は限りなく無に近い。だが、富士山高山域の植物相を長年にわたり精査されている渡辺長敬氏は、近年、それらしき鳥を目撃したことがあるという。

## 昆虫類

本調査で得られた昆虫類のうち、注目すべき確認種を以下にあげる。

### クロマルクビゴミムシ *Nebria ochotica*

マルクビゴミムシ *Nebria* 属は、河原や高山などの荒原に生息する種が多い。付節が長いのもこうした環境に適応した形態と思われる。本種は、夜間、八合目山小屋の灯火下に少なくなかった。滝沢 1,900m 付近の溶岩上では近種サドマルクビゴミムシ *Nebria sadona* を得ており、本種も同様の標高にまで分布している可能性があるが、富士山頂付近にも生息する昆虫種の一つとしてよいと思われる。

### タマキノコムシ科 *Hydrobius* 属の一種

同定を依頼した水野弘造氏によると、これまで日本未記録の属で、同様の種が山梨県韮崎市鳳凰山からも得られているという。生態については不明である。

### ムナグロホソツヤシデムシ

#### *Apteroloma discicolle*

ツヤシデムシ族 *Agyrtini* は、主に北半球の比較的高緯度地方や高山にかぎり分布する（上野ほか 1985）。富士山の高山域に分布する昆虫種の一つと考えられる。

### ヨツメハネカクシ亜科の一種

#### *Omaliniinae* Gen. sp. 1

本亜科には高山性の種も知られ、本種も山頂の雪渓から多数得られたことから、偶然飛来したというより山頂付近で生活している可能性が高いと思われた。種の確定には至らなかった（同定依頼中）ものの、興味深い種である。

朝比奈（1971）は、富士山頂剣ヶ峯測候所付近から 7 目 42 科 57 種の昆虫類を記録している。そして、「これらは高山性と考えられるものでなく、生活史未詳の小型の双翅類（ハエ目）をのぞいて

考えると、その生活史や食性からみて、6~9月の夏期以外につねに氷点下にある山頂付近に生育するものではない、むしろこれらすべての種類は富士山山麓地帯に生息するもので、気象上の理由によって吹きあげられたものと推定される」と述べている。しかし、今回、八合目で得た地表徘徊性のクロマルクビゴミムシ、ムナグロホソツヤシデムシの2種は、その生態的特性から高山域(3,000m付近)で生活しているものと思われたし、雪渓で得たヨツメハネカクシ亜科の一種もその可能性が高いと考えている。

St.8山頂、St.9八合目に設置した衝突板トラップでは、ナミホシヒラタアブ *Metasyrphus ferquwns*、アシプトハナアブ *Helophilus virgatus* の他にも、種不明の多数のハエ類、ハチ類が採集された。これらの昆虫類の中には、山麓から吹き上げられてきたのではなく、オンタデやイタドリなどの花粉を求めて積極的に移動してきたものもあるように思える。訪花性昆虫類による花粉媒介が、富士山高山域の植物限界の前進に寄与していることもあり得ない話ではない。

また、瀬子義幸氏の報告(生物相調査「チョウ目 蛾類」)にもあるように、八合目の山小屋では夜間、灯火に飛来する蛾も少なくなかった。山小屋の人からはお盆過ぎに富士山を越えるトンボの大群(ウスバキトンボであろう)を見たという興味深い話も聞いた。不毛に見える富士山高山域も、意外と“賑やか”なのであった。

## 文献

- 朝比奈正二郎(1971)動物相の垂直分布1) 気象の影響—とくに富士山頂の飛来昆虫類. In 富士山総合学術調査報告書, pp. 734-737. 富士急行
- 木澤綏・飯田睦治郎・松山資郎・宮脇昭(1969)富士山 自然の謎を解く. NHKブックス
- 黒田長久・千羽晋示・由井正敏・中村司(1971)富士山地域の鳥類. In 富士山総合学術調査報告書, pp. 856-948. 富士急行
- 今泉忠明(1992)富士山の動物たち—高山生動物はいない. In 富士山その自然のすべて, pp. 305-247. 同文書院
- 今泉吉典(1971)富士山の小型地上哺乳類と翼手類1) 富士山の小型哺乳類. In 富士山総合学術調査報告書, pp. 816-829. 富士急行
- 宮尾嶽雄(1971)富士山および御坂山地の小哺乳類. In 富士山総合学術調査報告書, pp. 833-840. 富士急行
- 宮脇昭・菅原久夫(1992)富士山の植物たち—典型的な垂直分布と火山植生. In 富士山その自然のすべて, pp. 277-294. 同文書院
- 上野俊一・黒澤良彦・佐藤正孝 編著(1985)原色日本甲虫図鑑II. 保育社

表2 富士山の高山域で確認された動物

	富士山頂			吉田口			植生限界 2600-2900m
	剣ヶ峯	雪溪	久須志神社	八合目	森林限界	七合目	
脊椎動物							
哺乳類 (綱)							
コウモリ目							
1 SP. 1							
2 SP. 2							
ウサギ目							
ウサギ科							
3ノウサギ							
ネズミ目							
ネズミ科							
4アカネズミ							
5ヒメネズミ							
ネコ目							
イヌ科							
6キツネ?							
イタチ?科							
7 SP.							
ウシ目							
イノシシ科							
8イノシシ							
9ニホンジカ							
10カモシカ*							
鳥類 (綱)							
タカ目							
タカ科							
11オオタカ*							
アマツバメ目							
アマツバメ科							
12アマツバメ							
スズメ目							
イワヒバリ科							
13イワヒバリ							
カラス科							
14ハシホソカラス							
無脊椎動物							
昆虫類 (綱)							
トンボ目							
オニヤンマ科							
15オニヤンマ							
トンボ科							
16ウスバキトンボ							
17ミヤマカネ							
ハサミシ目							
クキスキハサミシ科							
18コブハサミシ							
アザミウマ目							
アザミウマ科							
19アザミウマ科の数種							
カメシ目							
ウカ科							
20セジロウカ							
ツバゼミ科							
21ツバゼミ							
ヒロスヨコバエ科							
22クルマヒロスヨコバエ							
カンムリヨコバエ科							

		富士山頂		吉田口			植生 限界
		剣ヶ 峯	雪 溪	久 須 志 社	八 合 目	森 林 限 界	
							2600-2900m
23	キスジカンムリヨコバ <sup>イ</sup> ヨコバ <sup>イ</sup> 科					○	
24	ヨコバ <sup>イ</sup> 科の一種 キジ <sup>ラ</sup> ミ科		○		○		○
25	キジ <sup>ラ</sup> ミ <sup>亜</sup> 科の一種1 ア <sup>ブ</sup> ラ <sup>ミ</sup> シ科			○	○		○
26	ア <sup>ブ</sup> ラ <sup>ミ</sup> シ科の数種 メ <sup>ク</sup> ラ <sup>カ</sup> メ <sup>シ</sup> 科			○	○		○
27	マ <sup>ダ</sup> ラ <sup>メ</sup> ク <sup>ラ</sup> カ <sup>メ</sup> 類似種 ハ <sup>カ</sup> メ <sup>シ</sup> 科			○			
28	ヒメハ <sup>カ</sup> メ <sup>シ</sup> 属 ナ <sup>カ</sup> カ <sup>メ</sup> シ科		○				
29	ヒメハ <sup>カ</sup> カ <sup>メ</sup> シ属 カ <sup>メ</sup> シ科				○		○
30	ア <sup>オ</sup> ク <sup>チ</sup> ア <sup>ト</sup> カ <sup>メ</sup> シ* ツ <sup>ツ</sup> カ <sup>メ</sup> シ科						
31	セ <sup>ア</sup> ツ <sup>ツ</sup> カ <sup>メ</sup> シ				○		
32	ヒメハ <sup>サ</sup> ツ <sup>ツ</sup> カ <sup>メ</sup> シ ア <sup>ミ</sup> カ <sup>ゲ</sup> ロウ <sup>目</sup> ヒ <sup>メ</sup> カ <sup>ゲ</sup> ロウ <sup>科</sup>			○			
33	ヒ <sup>メ</sup> カ <sup>ゲ</sup> ロウ <sup>科</sup> コウ <sup>チ</sup> ユ <sup>目</sup> ハ <sup>ン</sup> ヨウ <sup>科</sup>						○
34	シ <sup>ヤ</sup> ハ <sup>ン</sup> ヨウ <sup>目</sup> オ <sup>サ</sup> シ <sup>科</sup>						○
35	ク <sup>ロ</sup> マル <sup>ク</sup> ヒ <sup>コ</sup> ミ <sup>シ</sup>					○	
36	マル <sup>カ</sup> タ <sup>コ</sup> モク <sup>シ</sup> タ <sup>マ</sup> キ <sup>ノ</sup> コ <sup>ム</sup> シ科						○
37	ア <sup>カ</sup> タ <sup>マ</sup> キ <sup>ノ</sup> コ <sup>ム</sup> シ						○
38	シ <sup>テ</sup> ム <sup>シ</sup> 科						○
39	ム <sup>ナ</sup> ゲ <sup>ロ</sup> ホ <sup>ソ</sup> ツ <sup>ツ</sup> ヤ <sup>シ</sup> テ <sup>ム</sup> シ ハ <sup>ネ</sup> カ <sup>ク</sup> シ科					○	
40	ル <sup>イ</sup> ス <sup>ハ</sup> ナム <sup>ク</sup> リ <sup>ハ</sup> ネ <sup>カ</sup> ク <sup>シ</sup> 類似種						○
41	ヨ <sup>ツ</sup> メ <sup>ハ</sup> ネ <sup>カ</sup> ク <sup>シ</sup> 亜科の一種		○	○			
42	シ <sup>リ</sup> ホ <sup>リ</sup> ハ <sup>ネ</sup> カ <sup>ク</sup> シ <sup>亜</sup> 科の一種			○		○	○
43	ハ <sup>ス</sup> オ <sup>ビ</sup> キ <sup>ノ</sup> ハ <sup>ネ</sup> カ <sup>ク</sup> シ <sup>近</sup> 種						○
44	ハ <sup>ケ</sup> ア <sup>リ</sup> ノ <sup>ス</sup> ハ <sup>ネ</sup> カ <sup>ク</sup> シ <sup>類</sup> 似種 コ <sup>カ</sup> ネ <sup>シ</sup> 科						○
45	ハ <sup>コ</sup> ネ <sup>ア</sup> シ <sup>ナ</sup> カ <sup>コ</sup> カ <sup>ネ</sup> *						○
46	エ <sup>チ</sup> コ <sup>ヒ</sup> ロウ <sup>ト</sup> コ <sup>カ</sup> ネ コ <sup>メ</sup> ツ <sup>キ</sup> シ科						○
47	コ <sup>カ</sup> ネ <sup>コ</sup> メ <sup>ツ</sup> キ						○
48	ミ <sup>ズ</sup> キ <sup>ワ</sup> コ <sup>メ</sup> ツ <sup>キ</sup> テ <sup>ン</sup> ト <sup>ウ</sup> ム <sup>シ</sup> 科						○
49	ヒ <sup>メ</sup> ア <sup>カ</sup> ホ <sup>シ</sup> テ <sup>ン</sup> ト <sup>ウ</sup>		○	○			
50	ア <sup>カ</sup> ホ <sup>シ</sup> テ <sup>ン</sup> ト <sup>ウ</sup>				○		
51	カ <sup>メ</sup> ノ <sup>コ</sup> テ <sup>ン</sup> ト <sup>ウ</sup> ヒ <sup>メ</sup> マ <sup>キ</sup> ム <sup>シ</sup> 科	○					
52	ヤ <sup>マ</sup> ト <sup>ク</sup> シ <sup>マ</sup> キ <sup>ム</sup> シ カ <sup>ミ</sup> キ <sup>リ</sup> ム <sup>シ</sup> 科						○
53	ヨ <sup>ツ</sup> シ <sup>ハ</sup> カ <sup>ミ</sup> キ <sup>リ</sup> *						
54	キ <sup>ハ</sup> リ <sup>カ</sup> タ <sup>ビ</sup> ロ <sup>ハ</sup> カ <sup>ミ</sup> キ <sup>リ</sup> ハ <sup>ム</sup> シ科			○			
55	ツ <sup>マ</sup> キ <sup>ク</sup> ロ <sup>ツ</sup> ツ <sup>ハ</sup> ム <sup>シ</sup>						○
56	シ <sup>ヤ</sup> マ <sup>ヒ</sup> ラ <sup>タ</sup> ハ <sup>ム</sup> シ						○

		富士山頂		吉田口			植生限界	
		剣ヶ峯	雪溪	久須志神社	八合目	森林限界		七合目
		3700-3776m	3680m	3720m	3230m	2900-3200m	2400m	2600-2900m
57	ホタルハムシ						○	
58	アサトビハムシ ゾウムシ科						○	
59	ホソヒメカタツウムシ							○
60	クワヒョウタンゾウムシ							○
61	ハチシヨウノミゾウムシ		○					
62	アカアシノミゾウムシ ハチ目 アリ科			○				
63	クロキクシケアリ						○	○
64	タカネムネホソアリ						○	○
65	アカヤマアリ						○	○
66	トビイロケアリ						○	○
67	ヤマクロヤマアリ				○	○	○	○
68	カラフトクロオオアリ ミツハチ科						○	○
69	オオマルハナバチ						○	○
70	ヒメマルハナバチ シリアゲムシ目 シリアゲムシ科						○	○
71	ブライヤシリアゲ						○	○
72	スカシシリアゲモトキ ハエ目 ツリアア科						○	○
73	ニトベハラホツツリアア ホトリハエ科						○	
74	SP. 3							○
75	SP. 4							○
76	SP. 5 ハナアア科							○
77	ナミホヒラタアア			○	○			
78	アシブトハナアア ミハエ科			○				
79	ツマホシケアカミハエ ハナハエ科			○				
80	ハナハエ科の一種 ニクハエ科							○
81	ニクハエ科の一種 チョウ目 メイカ科							○
82	マアカスカシノメイカ アゲハチョウ科					○		
83	キアゲハ マダラチョウ科			○				
84	アサキマダラ タテハチョウ科		○	○	○	○		
85	オウラキソシヒョウモン		○	○				
86	キヘリタテハ シヤクカ科						○	
87	ヒロオヒナミシヤク スズメカ科					○		
88	イブキスズメ ヤカ科					○		
89	タマヤカ					○		
90	コウスチャヤカ					○		
91	コキマエヤカ		○			○		
92	ニセタマヤカ					○		

	富士山頂			吉田口				植生 限界			
	剣 ヶ 峯	雪 溪	久 須 志 神 社	八 合 目	森 林 限 界	七 合 目	六 合 目				
	3700-3776m	3680m	3720m	3230m	2900-3200m	2950m	2400m	2600-2900m			
93 ウスイカバ <sup>*</sup> スジ <sup>*</sup> ヤカ <sup>*</sup>	<i>Sineugraphe bipartita</i> (Graeser)			○							
94 シロモンヤカ <sup>*</sup>	<i>Xestia nigrum</i> (L.)			○							
95 ミヤマハカ <sup>*</sup> タヨトウ	<i>Blepharita bathensis</i> (Lutzau)			○							
96 ショウブ <sup>*</sup> ヨトウ	<i>Amphipoea ussuriensis</i> (Petersen)			○							
97 オオシマカラスヨトウ	<i>Amphipyra monolitha surnia</i> Felder et Rogenhofer			○							
98 エゾ <sup>*</sup> キ <sup>*</sup> クキンウリハ <sup>*</sup>	<i>Ctenoplusia albostriata</i> (Bremer et Grey)			○							
99 ムクゲ <sup>*</sup> コノハ	<i>Lagoptera juno</i> (Dalman)			○							
100 アケビ <sup>*</sup> コノハ	<i>Adris tyrannus</i> (Guenee)			○							
101 アカエタ <sup>*</sup> リハ <sup>*</sup>	<i>Oraesia excavata</i> (Butler)			○							
102 ミツホ <sup>*</sup> シアツハ <sup>*</sup>	<i>Hypena tristalis</i> Ledere			○							
	確認種類数			6	7	23	19	4	13	14	36

哺乳類の確認 Vi:目撃 Dr:糞 Tr:足跡 ネ<sup>\*</sup>:ミ類の数字はトラップによる捕獲数計

屏風岩と大沢崩れは、確認記録に含めた範囲の標高を示す

和名の後に\*印で示した 5 種は、いわゆる「貴重種」に該当するため本報告「公開版」では確認地点を記述していない。